埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

〈Notes〉 Notes on the Death of Priest Shinnyo (Prince Takaoka) : A Tiger Killed the Dethroned Crown Prince ?

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2021-02-22
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 湯浅, 吉美
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1370

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

真如（高丘親王）の薨伝について

―虎に喰われた？元皇太子―

湯浅吉美

一　はじめに

冒頭からこのようなことを記すのは如何なものかと思うけれども、小稿はまことに微々たる、ノートにも足らぬメモに過ぎない。標題の人物の死因（死亡事情）について、たまたま新知見を見出すことがあったので、それを紹介しようとするばかりである。なお、研究ノートという性格上、一般的な辞典類によって周知されているようなことは、一々その典拠を掲げない。また、他学部・他学科の同僚方や学生諸君の目にも触れることに鑑み、日本史の文章としてはあらずもがなの解説的記述・注釈を加えている。併せてその意を諒とされたい。

真如は平安前期の密教僧で、真言宗祖空海の十大弟子の一人に数えられるから、相応に傑出した人物であった。俗名は高丘（高岳）親王、平城天皇の第三皇子である。第三ではあるが、大同四年（八〇九）、嵯峨天皇の太子に立った。平城と嵯峨とはともに桓武皇子で、同腹である（母は藤原乙牟漏）。兄から弟へ、次に兄の子へ、とわたされてゆく、古いタイプの皇位継承順序を踏んでいるといえる。ところが翌年、いわゆる薬子の変（平城上皇の変）に連座して皇太子を廃された。このあたりの政治状況や人間模様については、要するに北家藤原氏が権力を掌握してゆく過程としてさまざまに語られているから、ここで縷説する必要もなかろう。[*1]

親王が失意に沈んだことは想像に難くないが、それでもしばらく経った弘仁十三年（八二二）、四品に叙せられた。しかし、この処遇がかえって世を厭う気持ちを増幅させたものであろうか、間もなく出家してしまう。[*2] 生没年が不明瞭なので確たることはいえないが、貞観四年（八六二）に七十歳余との一説から延暦年間（七八二～八〇六）後半の誕生とすると、三十代半ばでの出家となる。初めから仏道に志した者と比べれば晩出家だが、事情が事情だけに、そこはやむをえまい。そして空海のもとで密教を学んだ。当時の空海は、弘仁十四年に嵯峨天皇から東寺を勅賜されるなど、名望を確立しつつある時期であったからして、いわば今を時めく法匠に入門したわけである。その後、修理東大寺大仏師検校となって活動したのち、入唐した。[*3]

真如に限らず、入唐の目的は、それぞれの問題意識にしたがって仏教をより深く学び、さらに淵源を究めようとするものだから、事情が許すならば、天竺（インド）に目が向くことは自然の成り行きである。とはいえ、島国日本から直接渡航することはほぼ不可能だし、中国を足がかりにして…と考えても、中国王朝の許可・支援が得られなければ、これまた不可能に近い。[*4] 真如も例外でなく、なかなか唐王朝の許しを得られなかったものの、ようやく許可が下り、咸通六年（八六五、日本・貞観七年）に広州を発って海路入竺の旅に上った。そして、羅越国において消息を絶ったのである。

二　造作された薨伝

真如の生涯および入唐・入竺をめぐっては、まとまった文献として次の三著がある。

① 杉本直治郎『真如親王伝研究　―高丘親王伝考―』（吉川弘文館、一九六五年）

② 澁澤龍彦『高丘親王航海記』（文藝春秋、一九八七年）

③ 佐伯有清『高丘親王入唐記　―廃太子と虎害伝説の真相―』（吉川弘文館、二〇〇二年）

このほかに単篇の論文も少なからずあるが、さしあたり措いておこう。

まず①は、すでに半世紀以上も前のものだが、およそ真如に関するかぎり、正にバイブルといおうか、百科全書と呼ぼうか、ともかく網羅的な大著である。実際、研究書として続くものは三十七年も後の③だから、いかに真如伝を描き尽くしているか、推して知るべし。歴史上の人物としての知名度は必ずしも高いと評せない人物の伝記研究に、菊判（A5判よりひと回り大きい）七百頁近い大冊というのは、あまり類がない。

次に②は、澁澤の遺作となった作品で、読売文学賞を受賞している。現行の文春文庫版所収の解説（高橋克彦）によると、「本の形になるのを見ずして」「受賞したことさえ（知らずに）……」世を去ったという。もとより小説であるから、①・③と並べて同列に扱うことはできないが、通説に従い、虎に害されたことになっている。いずれにせよ、澁澤の卓抜な着想と博識とに感心させられる一作ではある。[*5]

最後に③は、無論①を踏まえて、他にも多くの論考を参照しつつ、新たなる真如像を描いたもの。薨伝に関連する範囲でその特徴をいえば、虎害伝説成立の背景として、古来よく説かれる「捨身飼虎」譚による結構という見方を排して、真如が文殊菩薩に大柑子（夏みかん）を施さなかった記事（飢人布施説話）に着目すべきことを指摘した点であろう。簡略にいえば、真如が飢人（実は文殊菩薩の化現）に大柑子を施さなかった、その罰として虎に害され、入竺できなかったという説話を重視する。副題のとおり、廃太子の一件と虎害伝説とに関する、最もまとまりある現代的な文献となっている。

さて、すでにお気付きのことと思うが、真如の死亡状況については、いずれの研究者も共通して次の二点を認めているといってよい。すなわち、

・死亡状況は実は明確でない。というより、不明である。

・虎害伝説は、既存の説話等に依拠して、真如に仮託したも

のである。

つまり、虎害は伝説に過ぎないと断定しつつ、しからば実際の死因は何か？と問いかける方向性をもっていなかったといってもよいのではないか。その点を確認したうえで、順を追って整理してみよう。

まず、真如の死がどのようにして日本に伝えられたか。

六国史最後の正史である『三代実録』の元慶五年（八八一）十月十三日戊子条に以下のような記事がある（新訂増補国史大系本五〇三～五〇四頁）。

今得在唐僧中瓘申状�、親王先過震旦、欲度流沙。風聞、到羅越国、逆旅遷化者。

【訓み下し】いま在唐僧中瓘（チュウカン）が申状を得るに偏（いは）く、「親王、先に震旦を過ぎ、流沙を度らんとしたまふ。風聞するに、羅越国に到り、逆旅（ゲキリョ）に遷化したまふ」といへり。

親王はもちろん真如、震旦は中国のこと、流沙は西域・シルクロードの砂漠地帯、度は渡と同じで「わたる」と訓む。問題は羅越国で、ラヱツあるいはラヲツと読める。これが何処かについては、古くは語音の近似からラオスと考える説が多数派であった。しかし現在では、桑原隲蔵の「マレー半島の東海岸に於て、南は今のシンガポール附近から、北は北緯十度内外までの間に在った」との説が定説となっている。桑原の考証は『新唐書』地理志を拠り所とするもので、史料としての信頼度も高く、時代的にも相応しいので、従うべき見解であろう。要するに、マレー半島の南端東側ということになる。[*6]

しかしながら、やはり「風聞」であって、何ら確たる報告ではない。真如が出発した広州と羅越国との間は、俗に「海のシルクロード」と呼ばれるように、古くから往来が盛んであったから、文字どおり風の便りに聞こえてきたものと思われる。ゆえに、あまり些細な文言にこだわっても意味はないが、「逆旅」（旅の宿の意）とあるからには、ジャングルの中で虎に襲われたのではないように読める。もっとも、負傷して宿屋にかつぎこまれ、そこで息を引き取ったのでもよいわけだが、虎害、しかも一行四人が全員、などという、ある種、衝撃的な事件であれば、何かしらそれらしいことが伝わってきてもよい。総じて伝聞というものは、針小棒大に尾鰭がつくことはあっても、その逆は起こらない。何も書いていないということは、何も特別なことはなかったと見るべきであろう。

では、一体いつから虎害という話が語られるようになったのか。前出文献①・③によると、その初出は説話集『閑居友』であるという。この書は鎌倉前期、承久四年（一二二二）頃の成立で、摂関家九条良経の子、慶政の編とされる。その冒頭に「真如親王、天竺に渡り給ふ事」がある。その中に、

さて、返給べきほども過ぎぬれば、生死わきまへがたしとて、こまかにぞ尋ねありける。唐土の返事に、「天竺に渡り給ほどに、道にて終り給ふよし、ほのかに聞く」と侍りけるにぞ、初めて魂をうつし給よしを知りにける。（中略）さて、やうやう進み行くほどに、つひに虎に行き遇ひて、むなしく命終りぬとなん。

という一節のあるのがそれである。[*7]

ところが、慶政はそのあとに、

　このことは親王の伝にも見え侍らねば、記し入れぬなるべし。

と続けており、既存の親王伝に見えないから（慶政自身が見ている文献に新たに）記し入れたのであろう、とわざわざ断っている。しからば、慶政はこのとき何を参照して虎害のことを知ったのか、肝心の点を書いていない。思えば奇妙な話である。

　前述のごとく、羅越国がマレー半島の南端であることは疑いないとして、だとすると、虎に襲われることは十分にありうる。いわば「さもありなん」という死因なのだが、それならば、たとえば毒蛇・大蛇でもワニでも、同様にありそうなことに相違ない。そこが「なぜ虎なのか」という疑問の出発点となり、仏教ないしは仏教説話における虎の位置付け、虎のもつ特別の意味を想起して、虎害伝説の形成過程を解明してきたのが、文献①・③に集大成された在来の論考であった。小稿は、死因に関する新知見を紹介することが眼目なので、「虎害」はあくまでも造作された説話であると認めたうえで、その形成過程について再論することはせず、本題に移る。[*8]

三　真如の死因

　筆者は三十年来、縁あって東寺観智院金剛蔵聖教類の閲覧調査（毎年晩夏に三日間行なわれる）に参加し、その都度、報告の拙稿を発表させていただいている。いずれも書誌事項の記載と活字翻刻となので、必然的に全体を読むことになる。先般その一つとして採りあげた資料の中に、まさに唖然とするような一文を見出した。それが小稿の主題となった一事である。

　その資料は書名を『本朝真言附法血脈圖』という（東寺観智院金剛蔵　特4箱11号）。血脈（ケチミャク）とは、仏教（とくに密教や禅）において、師から弟子へと法灯が継承されることをいい、その証として与えられる文書をも同じことばで呼ぶ。文献資料としての血脈は、様式的にいくつかの類型があるけれども、総じていえば系図の体をとる。つまり、法灯継承の次第を擬制的に親子兄弟の関係と見て、それを書き表したものとなっている。その際、記載される人物について、出自、略歴、事績などを注記するが、その粗密の度合いは一様でない。詳細な注記をもつ血脈は、僧伝や寺伝の歴史的研究のために、きわめて有益な知見を提供するのである。[*9]

　しかしながら、史料として採用するにあたり、注意すべきことがある。それは、

・注文の典拠を必ずしも明示していないことが多いので、その信頼度を可能なかぎり別途検証する必要がある。[*10]

・世代を遡るにつれ、当然のことながら、その部分は既存の血脈から転写することになる。ゆえに、可能ならば、写本としての系統を追跡する必要がある。[*11]

この二点である。とはいえ、全体的に見れば、血脈は有効な資料といえる。

　さて本資料は、「第八高祖」たる空海に始まり、明算条に見える嘉承元年（一一〇六）を下限とする。したがって、十二世紀初頭から同前半代の成立と見て大過あるまい。第十一祖の聖宝を「尊師」と敬称し、世代としては成尊で終わっているところから、真言宗小野流の血脈で、三宝院流その他の諸流が分派する以前の態

様を示している。[12]

形態書誌的なことを若干記せば、全長十二メートルほどの巻子（カンス・ケンス）装（いわゆる巻き物）で、本文部分は二十七葉の料紙を継ぐ。貞和六年（一三五〇）の写。系図線と世代数、ごく一部の注記は朱書。また少数の異本注記、および追筆が間々あり、これらは顕著に賢宝（ゲンポウ）（南北朝・室町初期の東寺観智院の学僧）の筆跡と認められる。全巻にわたって十六か所に裏書がある。注記・追筆・裏書においては、努めて典拠を示しており、情報としての信頼度を高めようとしている態度が窺われる。[13]

冗漫な記述を許されたい。いよいよ問題の記事について記す。

第一紙から第二紙にかけて、巻首の空海から系図線が横に引かれ、空海の弟子たちが並んでいる。釈迦のそれになぞらえて空海十大弟子と呼ばれる人々で、右から順に実恵、真済、真雅、道雄、円明と並び、次に真如がいる。以下は杲隣、泰範、智泉、忠延である。真如の名の下にある注文を以下に示す（句読点は私補）。[14]

賢大法師位。平城天皇御子（第三宮云々）、高岳親王是也。改遍明。貞観三年入唐。従唐朝欲渡天竺、到流沙之邊羅越国遷化云々。或人云、水酔遷化云々。

【訓み下し】賢大法師位。平城天皇の御子（第三宮と云々）、高岳親王これなり。遍明と改む。貞観三年に入唐し、唐朝より天竺に渡らんとして、流沙の辺に到り、羅越国にて遷化すと云々。或る人の云く、水に酔ひて遷化すと云々。[15]

この最後の一句を見て、筆者は驚倒したのである。

「或る人の云く、水に酔ひて遷化すと云々」。真如は水中（あた）りで死亡したという。水中りは、一般的な国語辞書に拠れば、飲み水が原因で腹をこわすこととある。また、とくに旅先など慣れない土地でとか、生水でなどと付け加えているものもある。おおかた予想されるとおり夏に多く、俳句の季語にある。中原道夫「にんげんは　管でありけり　水中り」は、尾籠ながら激しい下痢症状を活写しているし、田村みどり「ひげの無き　イエスに近し　水中り」は、脱水症状でげっそりとなった容貌を髣髴とさせる。

もう少しもっともらしい説明を求めるならば、クリプトスポリジウム症という。ウシ、ネコ、ニワトリなどの腸内で繁殖した原虫を摂取することで起こる感染症で、5類感染症に指定されている。つまりは動物の糞便に汚染された水を口にして罹るわけで、その点、ずいぶん不衛生な、あるいは前近代的な、あえて言えば未開の地で罹患するもののように思えるが、つい二十数年前にも首都圏で集団発生した事例があるから油断ならない。ふつうは十日ほどで自然に治るものの、幼児、高齢者、病者など免疫機能が低下している場合には重症化することもあるという。

また、これ以外にも水系感染症全体として見るとき、原因には原虫のほか、ウイルスやバクテリアもあり、病症にはコレラ、赤痢、レジオネラ症、腸チフスなども含まれるから、医療の未発達な時代や地域においては、生命にかかわることも少なくない。二十一世紀の今日でも、世界中では毎年百数十万人が水系感染症で死亡しているという。真如の場合、一行四人が揃って消息を絶っているから、虎害よりもこのほうが蓋然的と思える。[16]

ところで、問題は右の記事の出どころである。「或る人の云く」というけれども、一体どこから出た説なのか。結論を言えば、わからない。[17]虎害（伝説）以外に、真如の死因を記す資料は管見に

入ったことがないし、写本系統上この血脈と近縁にあると見られる別の血脈でも未見である。ということは、おそらく賢宝が独自に獲た情報なのであろうが、彼もまた半信半疑であったのかもしれない。[18] 血脈に限らず、こうした資料で「或るいは云う」「或る本に云う」「或る説に云う」のように典拠を明示しない書き方は珍しいものではなく、筆者の経験的印象では、明示する／しないは相半ばするかと思う。典拠を明示していないからといって、怪しげな浮説として一蹴する必要は毛頭ない。むしろ「火のないところに煙は立たぬ」式に受け容れるべきであろう。

以上のような次第なので、水中り説が信用できるかどうか、何ともいえない。一方、虎害説は、最初から説話をベースにした創作、もしくは風聞に過ぎないと見るべきもののようである。遷化の場所柄、どちらも大いにありそうな話だが、虎害説のほうが、捨身飼虎譚にせよ飢人布施説話にせよ、単純な事象でなく（仏教的に）意味や因縁のある出来事として成立していることは、いかにも「机上の造作」であることを感じさせる。それに対して水中り説は、すこぶる淡々としており、何の曲もない。どちらが事実（に近い）かと考えるとき、後者を採るのが史料読解の基本的態度である。もちろん今後、別の資料から他の死因が知られることがあれば、それはまたそのときに検討することになるが、今この両説から一方を選べと言われたら、水中り説を採るのを妥当としなければならない。それはさておき、伝説として造作された虎害とは別の死因が初めて見出されたという理由で、本資料は記憶に留められてよいと考える。

四　むすびに

天皇家の人物が外地で消息不明というだけでも十分にセンセーショナルだが、しかもその人物は元皇太子であり、あろうことか虎に喰われたという。日本史上に類を見ない逸話である。だからこそ、文学賞をとるほどの小説の題材ともなった。翻って、水中りで…というのは、何とも精彩に欠ける。しかし、史実とは、歴史とは、そういうものかもしれぬ。耳目を驚かす出来事は、そうそう起こらぬものなのだ。新知見の興奮と、ロマンの潰えた失望とが、こもごも去来する執筆であった。

例によって…と言っては、本紀要ならびに同僚諸賢に対してまことに失礼で申し訳ないのだけれど、今回の小稿もまた、他愛ない雑文に終始した。実は背後の事情として、できれば三年次の我が「専門演習」の学生諸君に読んでもらい、間もなく本格的に取りかかることになる卒業論文のモデルともなれば…と烏滸がましくも考えた、という内情がある。もう一つには、研究を続ける過程で際会した、ちょっとしたニュースや雑感などを披露するような、学術雑誌でよく「余滴」などと呼んでいる投稿形態が、この紀要にもあってもよいのではないかと思い、あえて物した次第である。

とはいえ、本文に述べたように、これまで知られていなかった、というよりも、どこぞにあるかもしれないとさえ思われていなかったに等しい、真如の死因に関する新出史料を見出した報告であることは確かである。紹介した史料は、その記述が淡々としているだけに、相応に信憑性があると筆者は見ている。中身は、つ

（三六）

まらぬといえばつまらぬ話に相違ない。真如が水中りで亡くなろうが虎に喰われようが、平安時代の歴史叙述には何の影響もないのだ。しかし、伝すなわち歴史というものが、どのように「創られて」ゆくか、そして、それをどのように再検証できるのか、そこに眼を向けてほしい、そんな気持ちで書いた。ここには、学部の卒業論文に求めたい要素をひと通り盛り込んだつもりである。願わくは、卒業論文を書いて楽しかった、大学に来てよかったと、来年の今ごろ諸君が晴れ晴れとした顔つきで提出しに来るのを待っている。ゆめゆめ「ひげの無きイエス」にならぬこと。必ずや諸君はもう少しマトモなものを書いてくれるであろう。その期待を胸に、埒もなき筆を擱く。

注

*1　ちなみに、平城の第一皇子は阿保親王。やはり薬子の変に連座して、大宰権帥に左遷された。その王子、行平・業平は臣籍に降って在原姓を賜った。つまり真如は、かの色男の総代的人物の叔父ということになる。

*2　親王なので「位」ではなく「品」（ホン）だが、四品は四位に相当し、いわゆる公卿ではない（公卿の位階は原則として三位以上）。仮にも一旦は皇太子であった人物としては、屈辱と感じて当然である。とはいえ、事に座して廃された以上、命を全うできただけでも可とすべきかもしれない。

*3　そのころの密教の中心寺院は、古代国家最後の官寺ともいうべき東寺と、空海が願い出て下賜された高野山と（いずれも造営途上）であったが、一方で空海は、東大寺に真言院を創立し、また東大寺を本寺とすべき旨、その『遺告』に明言しており、浅からぬ関係を築いていた。したがって、空海の門下が東大寺において検校の任に就くことは、意外ではない。ただし、『遺告』全編を空海の作とすることには多少問題がある。なお真如は、法隆寺の再興に与った南都仏教界の道詮から、三論宗も学んでいる。

*4　日本は、近代以降には造船大国などと謳われた時期もあるが、古代の日本船の航洋性はまことに心許ないものであった。絵巻など絵画資料から復元された遣唐使船を見るに、船体を前後に貫く竜骨をもたず、いくつかの箱を接ぎ合わせただけのものなので、波が荒く潮流もある外洋に出ると、前後が泣き別れとなって遭難することがしばしばあった。ほぼ平底ゆえ、進行方向に波を越える凌波性も、左右の傾きからの復元性も、ともに無きに等しい。喫水が浅く、内水面には適しているから、日ごと夜ごとに船繋りしながら沿岸を航行する分には、さほどの危険もなかったであろうが、東シナ海には太刀打ちできない。しかも、中国王朝の正月儀礼に合わせて日程を組むため、いわゆる台風シーズンに当たることが多い。よく知られているように、遣唐使が四隻に分乗したのは、そのためのリスク・マネージメントに他ならない。一方、帰国のときは大概、中国船で送還されたので、比較的安全であった。

*5　たいへん幻想的な作品で、解説の高橋に言わせると「大人の小説」だから、「四十になり、五十になって読み返して欲しい」とのことだが、残念ながら若い頃には読まぬまま還暦を越してしまった筆者は、感じ方の違いを実感することができなかった。ともあれ、この作品では、親王は自ら死を意図して、夜間単身、虎の徘徊する籔に入ってゆき、翌朝探索に向かった弟子たちの見出したものは、「ただ血に染んだ骨いくつか、しらじらと朝の光に照っているのみだった」という。そこはかとなく虎に害されたことが伝わってくるものの、理屈をいえば確証はない。むしろ、虎害が史実として読者に了解されていることを前提とした描きぶりといえる。

なお、近藤ようこにより、この作品を下敷きにしたコミックスが制作され、つい最近、単行本化された（ビームコミックス。KADOKAWA、二〇二〇年）。

（三七）

*6　ご存知の向きも多いと思うが、念のため。シンガポールがほぼ赤道直下に位置し、錫の産地として知られるクラ地峡が北緯十度附近にある。『広辞苑』の新村出がマラッカ海峡を通過しながら書いた、誰人かの著書に贈る序文に、海のことをマレー語でラウット（laut）ということから、真如親王終焉の地、羅越国は正にこの辺りだと感慨を抱いた、という内容があったことを記憶する。遺憾ながら、件の書物を今どうしても思い出せない。

*7　『閑居友』は新日本古典文学大系（岩波書店）所収の本文に拠る。第四十巻、三五九～三六三頁。この段については、諸本間に大きな異同はない。同書の特徴として、一般的でない仮名遣いがしばしば見られるが、ここではそれを改めたうえで示した。たとえば、「つひに」は原文「ついに」に作る。

*8　仏教と虎との関係として代表的なものが「捨身飼虎」譚である。釈迦が前世において菩薩（修行者）であったときの善行を集めた「ジャータカ」にある話で、飢えに逼られて我が子を喰おうとしている虎を見て、身を投げ出して親子虎の命を救う。つまり、虎に喰われることが、後に如来となる（解脱する）ための善根功徳となっている。法隆寺の玉虫厨子に描かれており、日本でも古来よく知られていた。

*9　本資料の報告は、拙稿「東寺観智院金剛蔵『本朝真言附法血脈圖（特4箱11号）の調査報告と翻刻』（『成田山仏教研究所紀要』第四十三号（二〇二〇年））に発表した。

*10　このことは、史料（資料）批判の基本として、あらゆる資料において求められることだから、別段、血脈の特性というわけではない。

なお、この「注文」は注記の文の意だが、この意味に用いる場合、語頭の「チュ」にアクセントをつけて発音する（古典中国語の四声のうち、去声）。

*11　このこともまた、あらゆる資料において考慮せねばならないことである。ちなみに書誌学では、写本という語はもっぱら手書きの本の意に用い、印刷された刊本（版本）と対になる。このため、原著者直筆のものも「写本」という。世間一般では又写しのものを写本と呼んで原本と区別するが、書誌学ではそうではない。ある本から又写しした本は転写本（漢籍では重鈔本）と呼ぶ。

*12　密教はその始まりを大日如来とし、金剛薩埵、龍猛、龍智、金剛智、不空、恵果、空海と付法相承されたとするので、日本の空海が第八祖となる。これが付法八祖と呼ばれるもので、それとは別に伝持八祖という数え方もある。こちらは龍猛に始まり、龍智、金剛智、不空、善無畏、一行、恵果、空海をいう。大日如来と金剛薩埵はいわゆるホトケさま、龍猛以下がヒトである。多くの血脈は空海から、もしくは流派の祖から記載を始める。

日本の真言宗は、平安時代に小野と広沢との二流に分かれた。密教では、師から弟子へと伝法する際に、複数の弟子に対して全く同じに伝授されるとは限らないので、分派が起こりやすい。野沢（ヤタク）二流は後にそれぞれさらに分かれ、主な流派だけでも野沢十二流とか三十六流などといわれる。

*13　南北朝から室町前期にかけての観智院は、同院開基の杲宝（ゴウホウ）を中心として、東寺における学術センターないしは東寺史編纂所のごとき様相を呈していた。杲宝ゼミナールと通称されることもある彼ら一団は、その材料として実に精力的に諸寺諸家に蔵する資料を閲覧、転写しているが、奥書（おくがき）などから知られるその筆写速度は驚嘆に価するもので、まさに「夜の目も寝ずに」の観がある。その成果の一つが大部の『東宝記』十二巻一冊（国宝）だといえるし、かくして蒐集された資料の生き残りこそ、今なお数万点を数える観智院聖教類なのである。

*14　横に並ぶ弟子たちは、通常、右すなわち師に近いほうから、受法した年月日の早い順となっている。

*15　「第三宮云々」は、「御子」の右傍に注記。「貞観三年」の「三」は、左傍に抹消符号を施し、右傍に「四イ」と異本注記。「流沙之邊」は、「到」

「羅」の字間に挿入符を置き、右傍に注記。賢大法師位は、僧の位階の一つ。真如が在唐中に遍明と改名した件は、文献①に詳しく考察されている。

*16　以上の記述は、いささか安直だが、電子辞書に収められた『ホームメディカ　新版　家庭医学大事典』（小学館、二〇一一年）やインターネット上のWikipediaに拠る。

*17　こう簡単に片付けてしまっては身も蓋もないが、資料を博捜したうえで熟考された杉本・文献①、佐伯・文献③の両氏が、真の死因について全く言及していないという事実こそ、虎害以外の死因を記す資料が見当たらないことを証している、ともいえる。

*18　虎害伝説の初出とその後の流通について文献③にしたがうと、賢宝はすでに十分知っていた可能性が高い。にもかかわらず、ここで虎害に触れていないことに注意する。賢宝は真如の虎害説を疑問視し、死亡事情に関する情報を探求したのではあるまいか。

Notes on the Death of Priest Shinnyo (Prince Takaoka)

A Tiger Killed the Dethroned Crown Prince ?

YUASA, Yoshimi

キーワード：真如、高丘親王、虎害伝説、真言宗血脈、東寺観智院
Key words ：priest Shinnyo, prince Takaoka, legend of killed by tiger, genealogy of shingon esoteric buddhism, the Toji-Kanchiin temple